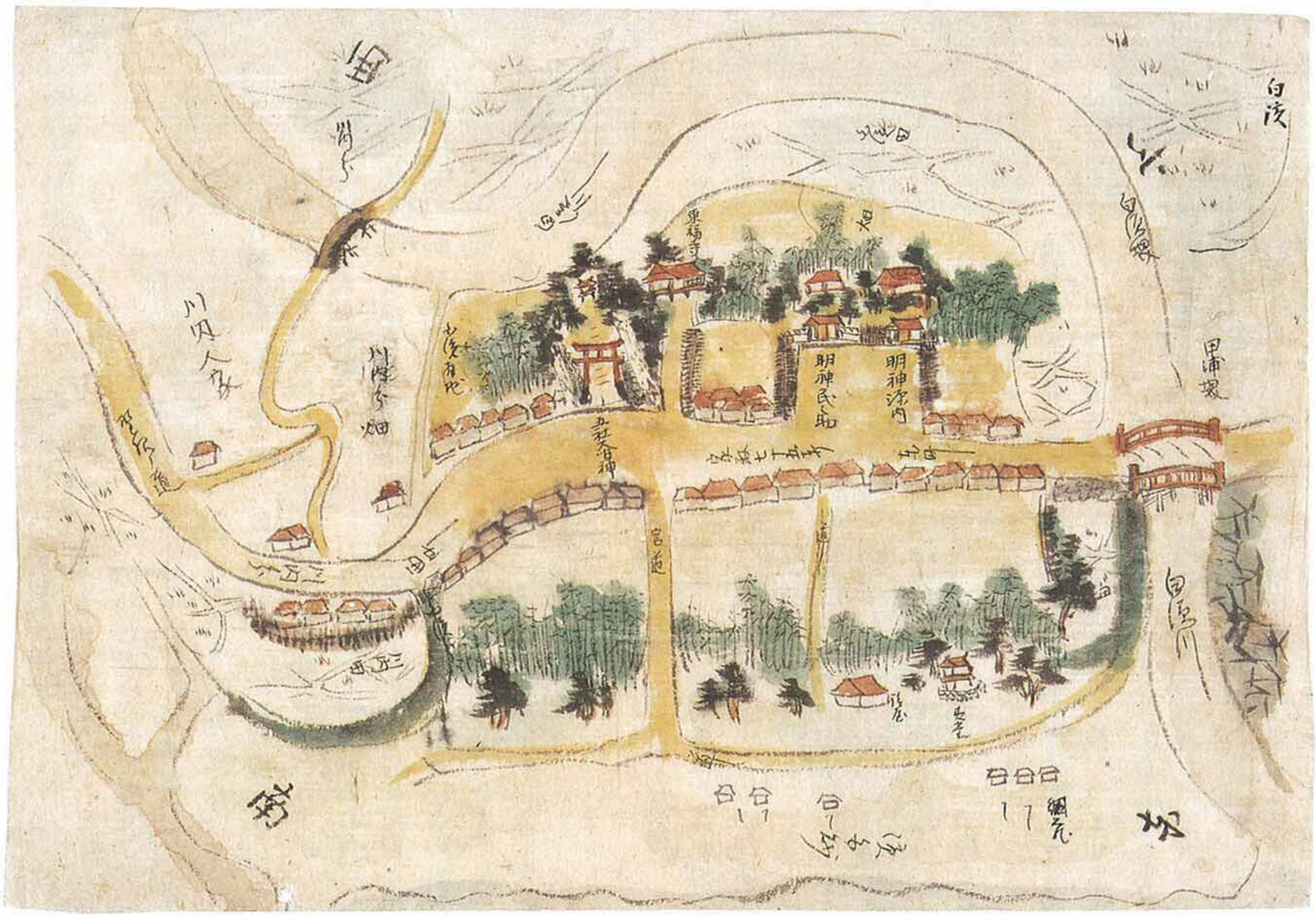
岡豐風月

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第55号 2005年11月1日



白浜図（土佐国浦々之図）

資料見聞

土佐国浦々之図より 白浜図

海水浴でにぎわう東洋町白浜は、元々人家もなく、草木も育たない一面の砂浜でした。

約四〇〇年前、尾張出身の明神六（郎）左衛門は、長宗我部元親を頼って土佐に来国します。

そして、戦乱の世が終わり、山内氏が土佐の大名になると、子孫の明神忠右衛門は藩主のお墨付きをもらって白浜の本格的な開発に着手したのです。

新浜（新浦）となった白浜の中心には、江戸後期頃の当主、明神源内（白浜村庄屋）と明神民之助（野根在番役）の屋敷が象徴的に描かれています。

対照的に周辺の人家・河川・往還・砂浜などは都合よく圧縮・省略して描かれていることから、極めて支配色の強い空間描写といえましょう。

本図の最大の特徴は、何といっても典型的な村絵図でありながら、繊細な彩色を施した水彩画・風景画の雰囲気を兼ね備えている点にあります。

ちなみに、民之助は文化一〇年（一八一三）に在番役に就任。天保一五年（一八四四）には病死していますので、本図の成立はこの時期かもしれません。

（野本　亮）

新発見の浦方絵図

「土佐国浦々之図」の見どころ紹介

野本　亮

地図と絵図

地図と絵図の違いって何でしょう？近代における「地図」とは、測量したデータを基にして、統一した記号と等高線を用いて正確に地表の状態・空間を表したものをいいます。

それに対して「絵図」とは、測量技術が未発達の時代に、絵画的手法によって描かれたものを指します。

もともと「絵図」という資料用語は、平安期にまで遡るとされ、大和絵的な手法を交えた美麗なものを意味することが多かったようです。

しかし、中世になると、荘園絵図や寺社境内図のような地図的な図に限定されるようになりました。

近世になると、その種類は激増し、代表的な国絵図の他、城絵図・城下町絵図・領内絵図・村絵図・街道図・河川水路図等々、枚挙にいとまがないほど多様化していきます。

また、製作方法別に分類するならば、実測と縮尺をもとに作られた「分間（ぶんけん）絵図」と、測量せず従来の手法で描かれた「見取絵図」に分類することもできます。後者の場合、当然その構図には、製作者の強調したい要素が凝縮して表現されると同時に、不要なものは省略されます。「絵図」の構図や内容によって、製作者の立場や意図が読み取れるのが魅力の一つというわけです。

「土佐国浦々之図」とは？

平成一五年、東京のとある古書店で高知県関係の絵図が売りに出されました。調査の結果、約七〇枚のすべてが江戸期の浦方（海浜集落・漁村）を主に描いたものと判明しました。予算措置のうえ、直ちに購入したのですが、これまで高知県内では未確認の資料であり、この新資料をどのように位置付けるかということにかなりの時間を要しました。そして、調査の過程で浮上してきた疑問の一つに、製作時期に関する問題があったのです。

各絵図には、全くといっていいほど、年代を特定できるような記載がありませんでした。ただ、絵図を収納していたと思われる和紙袋が添付されていて、表には「文化十四丑年三月浦々図」という標題が墨書されていました。袋の標題が文化一四年だからといって、すべての絵図がこの年に成立したとは断言できませんが、巻頭でご紹介した「白浜図」もこの時期と特定される記載があり、文化年間の成立という線はかなり高いものと思われます。

しかし、文化年間であれば、当然異国船警備のための大筒（おおづつ）の配備と拠点整備が行われたはずです。この資料群のなかで、海防に直接関係するものはあまりなく、年代比定のうえで大きな謎となっています。

「浦方絵図」としての特徴

次に、この絵図群は、誰が何のために作らせたのかという点が問題でした。「土佐国浦々之図」というのは、袋の標題からつけた仮題であり、実際の名称ではありません。そもそも、「土佐国」と大きいタイトルをつけていますが、土佐の浦すべてが網羅されているわけではないのです。

近世土佐の領内浦分のうち、該当するのは圧倒的に下灘（しもなだ）、つまり土佐西部の浦です。もう少し詳しく説明すると、高岡郡・幡多郡の浦だけで大半を占め、東部では、僅（わず）かに長岡郡が一箇所。香美郡は皆無。安芸郡は七箇所程度しかありません。

文化十四丑年三月浦々図袋

これが、上灘（かみなだ）の浦だけを意図的に省略したのか、最初は現存していたものがのちに散逸したのかは、現在のところ不明です。

また、西部土佐が重点化されているなかで、下田浦のみ極端に構図が異なっている点も気になるところです。

絵図の描写には統一された画法は見られないものの、料紙（りょうし）の大きさがほぼ統一されている点。浦境を象徴する岩礁（ハエ）や、往還・氏神・河川等が強調されて描かれている点。藩の行政機構である、分一役所や庄屋、米倉・火立場・遠見番所（とおみばんしょ）などが忠実に描かれている点などを見ても、単なる絵師の手なぐさみや旅の記録などというものではなく、領内各浦々の現状把握という土佐藩上層部の政治的意向が垣間見えます。前述した袋の標題の斜め上には、「八ノ八」というナンバリングがあり、この点からも役所の所有であった可能性を指摘することができます。

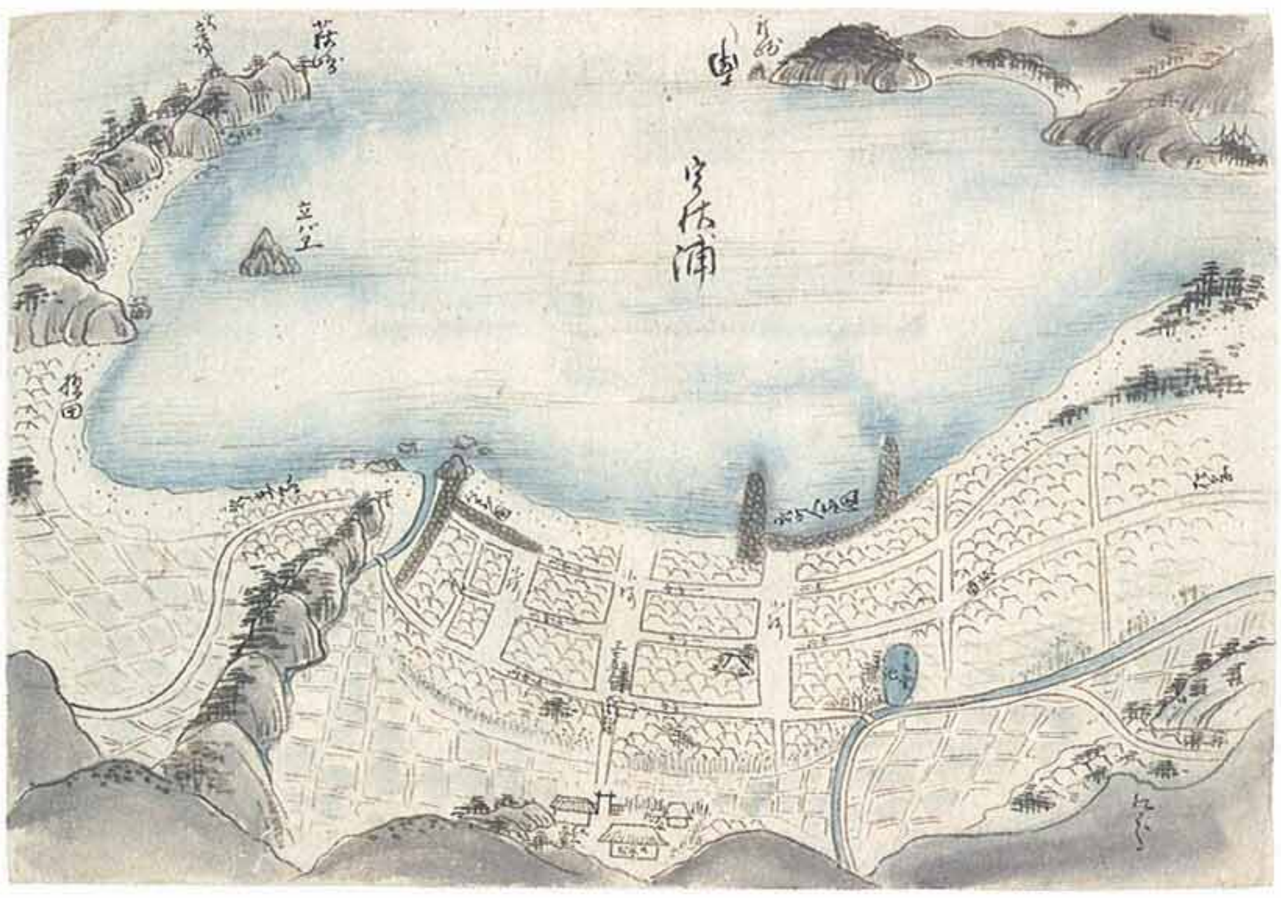
調査方法

今回、個々の浦方絵図を調査するにあたって、もっとも力を入れたのが、フィールドワークです。

無論、歴史分野の企画展ですので、絵図そのものを文献史料の一種として考察する方向も模索しましたが、やはり、現地調査をせずに描かれている事象を把握することは不可能でした。

調査にあたっては、地籍図・地形図・住宅地図などと比較しながら、その絵図が描かれた中心点を探し出し、ランドマークとなる、山や岬、岩礁などの構成を何度も確認しながら、重ねあわせていきました。

しかし、実際には、船に乗って沖合から描いたとしか思えないものや、どこを起点にして描いたのかが全く解らないものもありました。この鳥瞰図的手法で描かれた「宇佐浦図」の場合は、偶然、遍路道でもあった塚地峠付近から見下ろして描いたものであることを突き止めました。



宇佐浦図（現土佐市）

偶然はそう何度も続きません。時間のロスを避け、調査の精度を上げるため、途中から当館の資料調査員である矢木伸欣氏（宿毛市立宿毛歴史館学芸員）に宿毛方面を、東洋町方面を原田英祐氏（郷土史家）にお願いすることにしました。国境（県境）付近のみでしたが、地元の方ならではの鋭い視点を加味できたことは今回の収穫だったと思います。

さて、こうした調査の結果、図中に描かれている事象のなかに、呼称や形状を変えながらも、現存し続けているものが案外多いことが分かってきました。ほんの少しですが、フィールドノートから面白そうなものを拾ってみましょう。

地域に生き続けるもの

土佐藩の浦方支配を象徴するものに、「御分一役」があります。浦奉行のもと、各浦分に派遣された役人で、軽格でしたが職務は極めて重要でした。その浦役人が居た屋敷を「分一役所」と呼んでいたのです。

多くの浦方絵図には、この役所そのものが描かれていますが、現在、それがどの場所にあったのかという点については、ほとんど解明することができませんでした。

貝ノ川・歯朶ノ浦図〈部分〉（現土佐清水市）

しかし、調査も終盤になり、土佐清水市貝ノ川地区で、小字名または屋号として生きている「分一役所」の跡を確認することができました。

現在、地元では、その場所を「ぶんち」といい、屋地の前を「ぶんちの浜」と呼んでいます。今でもその周辺には石組が一部遺っていて趣があります。

地名といえば、地元の漁師さんに聞かなければ絶対分からないものに、岩場・岩礁名を指す「ハエ（ハイ）」があります。

絵図のなかでは、隣浦との境界を示す目印として、この「ハエ」が大きく描かれていることが多く、調査のポイントになることがしばしばありました。「太郎バエ」「次郎バエ」「ゴゼバエ」「馬の背バエ」など、誰が付けたのかも分からないユニークな呼称が数百年経った今でもしっかり使われています。

ある港で出会った漁師さんは、「あの東に見えるがが、デンキヤバエ。ほんでその横がゴクドウバエよ」と、絵図に載ってない名称をすらすら言うので、その由来を聞くと、「この近くの電気屋と仕事もせんごくどうもんが、ようそこらの岩場で釣りよったけ、ワシがつけた」とのこと。

思わず大笑いしてしまいましたが、案外絵図の中の世界には、こういう要素も含まれているのではと、妙に納得してしまいました。

歴史地理学と民俗学的な要素が詰まった展示会場で、是非あなたも江戸時代の「絵解き」に挑戦してみませんか。

ひと16

大脇（おおわき） 保彦（やすひこ） さん

プロフィール

昭和八年高知生まれ。歴史地理学。昭和四八年から平成三年の退官まで高知大学で地理学担当。高知県文化財保護審議会委員。『土佐における戦国期末村落の一様相―庄園内部の村切り化の一事例―』他論文多数。

地理の楽しみ

ぼくは小学生の頃から地理が好きで、空想の地図の上で港や首都、宝島を作ったり、鉄道を走らせたりしてイメージを膨らませていました。トーベ・ヤンソンがムーミン谷の地図を描いたようにね。

地理学の道を歩くきっかけは、京大農学部に入学後、教養課程で受講した藤岡謙二郎先生との出会です。先生の薦めで初めて志を立て、文学部に転じ幸運でした。

新米教師時代には、同志社系列中高六校の地理教師仲間で、月一回の各自の調査報告の雑談や専門洋書の輪読などの会を持ち、忌憚（きたん）無く批判しあい、互いに刺激を受けたりで懐かしい。その後、専修大学を経て、高知大学に着任したのが昭和四八年。

その年の秋、高知県立図書館で第一回の古地図展があり、先輩の矢守一彦さんから頼まれ、目録を送ったところ「高知の古地図研究も徹底的にやれ」と言われ、『日本城下町絵図集』の高知城下町の項の執筆の機会もあたえられ、「寛文九年高知廓中図」を取り上げました。その過程で全国的によく引用される『高知県史要』所載の寛文七年図すら現存せず、城下町絵図原図の乏しさなど痛感しました。さらに絵図資料の吟味など検討すべきことは多いですね。

思えば地理一色で生きてきました。地理の楽しみは読図の面白さですよ。どんなことが読みとれるか。それからフィールドワーク。学生を連れて随分行きましたよ。歩いてこそわかることがあります。

国絵図にみる国と村

国絵図は大事ですよ。高知市民図書館蔵の土佐国絵図は他にありません。文化財に指定すべきと思います。

幕府が慶長（けいちょう）と正保（しょうほう）と元禄と天保の計四回集めたものを、四大国絵図といいます。このうち慶長の絵図は土佐藩を含め、ほとんど残っていません。次の正保のときに、絵図小屋が本郷に設けられて地図を作る様式もだんだん整い、元禄で完成します。幕府は国単位に絵図を作らせました。例えば、伊予は八藩が連合で作れと。それまではっきりしていなかった国の境が絵図を作るときに顕現化し、国境論争が全国的に出てきました。そのひとつが土佐と伊予との沖ノ島・篠山（ささやま）論争で、その決着がついて国境が決まったのです。

元禄国絵図では郷村帳（ごうそんちょう）も整えられ、公式の村名も決まってきます。しかし、一言で「村」といっても、いろいろな段階があります。郷があったり庄があったり藩によって実体が違っても、幕府は国絵図を作るときに藩制村としての「村」に統一したのです。藩制村に納まらない村の中の小さな村は枝村や枝郷にしました。本村と枝郷がある場合もあれば、枝郷だけの場合もある。いろんな類型はどうして出来たのか、貢租（こうそ）の徴収はどうしたのかなど、課題はたくさんあります。国絵図を集めて幕府は日本図を編纂しましたが、最後の天保図では作りませんでした。伊能忠敬（いのうただたか）の測量が始まったからです。

地検帳から読みとれること

地検帳そのものの分析が、最近、気になっています。地域差を調べるためには史料を全体的に吟味する必要があります。

地検帳には、所有や生産などの中世的な関係が出ていますね。地検帳から中世と近世への向き方が読みとれるのです。例えば、地検帳に出てくる「代」は、意味から言うとシロだけど土佐人はダイと読みます。条里制以前の地割（じわり）の単位です。そんな古い単位が、土佐では江戸時代まで残っていました。横川末吉（よこがわすえきち）さんは、太閤検地で丈量の単位や検地竿が変わるが、安芸郡の地検帳では途中で変わっていると指摘された。では、それ以前の検地をどうしたのか。乱暴な言い方ですが六尺五寸の検地竿をそのまま六尺三寸に直した可能性も検討の余地があります。また、前述の代は古代からの系譜を引く丈量呼称ですが、太閤検地では三百歩（坪）一反で、地検帳では依然として五十代が一反ですから一代は六歩（坪）となり、律令期の一代七・二歩とは変質しています。これに検地竿の変化が加わると、前検地高からどう変化したかなどの先行研究を知りません。縄延びなどもあり、現代的レベルの正確性は困難にしても、為政者・農民間の関係を論じるための基礎的作業の一つではないでしょうか。

地検帳の小村から、藩制村下の枝村・枝郷へ、その変わり方にも地理屋は興味がありますね。地検帳の研究を若い人にもっともっとやって欲しいと思います。

地図・絵図研究の可能性

伊能図は海岸線だけですが、経線・緯線を実測し、投影法を使用した近代図です。地図に書き込める情報は限られますが、カーナビにも応用されている地形図のコード等を利用して、パソコンで各地点の歴史的な情報等を入力しておくと様々な分布図が描けます。そういうものを開発すれば歴史や地理の研究がもっと進むと思います。近代図に小字（こあざ）を書き込むことや地検帳の地図化も必要でしょう。

今回、村絵図すらないところに浦方絵図が七〇枚も出てきた。これは凄（すご）いことです。描かれた情報から浦支配の様子などが読みとれるのではないでしょうか。展示が楽しみですね。

（聞き手　野本・中村）

テーマ展

坂本龍馬

一一月一日～一二月四日

坂本権平湿板

常設展示室のケースをまるまるひとつのテーマで埋めてしまうテーマ展示。平成一七年度第二弾は、生誕一七〇年を迎える「坂本龍馬」です。龍馬の手紙や寄せ書きなど館蔵の龍馬資料の大半を公開するほか、一一月一日㈫～一五日㈫は、龍馬湿板の実物をはじめ、龍馬の妻「おりょう」とされる写真や、龍馬の兄・権平の写真を特別展示します。龍馬ファンならずとも必見です。

（野本）

新企画

路線バスで行く、おいでよ！れきみんツアー

路線バスに当館への直行便がある事を多くの県民の皆様に知って頂き、路線バスでの来館を促進するために行っております。あわせて当館の裏側をお見せして、私どもの仕事に少しでも触れて頂く事により、いっそう身近な資料館として親しんで利用して頂きたいとの願いもこめられております。

今回第一回目「れきみんツアー」は八月一四日㈰、二二名の皆様にご参加を頂き、好評の内に無事終わりました。概ね二ヶ月に一度のペースでこれからも予定していますので、ぜひお誘い合わせの上ご参加下さい。お待ちいたしております。

（猪野）

土佐の民具18

タノキノシオキ

坂本　正夫

昭和五〇（一九七五）年頃までは四国山地の村を歩くと、茶の間の隅や納屋、土間あるいは倉の壁、柱などにタノキノシオキ（狸のしおき）と呼ぶ写真のようなワラスボ（稲藁の包み）を吊している民家をよく見かけました。

タノキノシオキは発熱や破傷風、打ち身、風邪、できもの、リュウマチなどのとき少量の味噌を入れ煎じて飲むとよく効く民間薬ですが、語源は「タノキ（狸の方言）の肉の塩漬け置き」です。

冬の間に捕獲した狸の皮を剥（は）ぎ取り、腹わたを除去して細かく切り、桶（おけ）やハンド（かめ）などに入れて塩漬けにします。これを真夏の土用に取り出し、板や石の上に並べて天日でよく乾かしてから、塩をして元の容器に入れますが二日ぐらいで再び取り出し天日でよく干し、また塩をして容器に入れます。これを数回繰り返してよく乾燥させてから藁スボに包んで堅く縛り、適当な場所に吊して保存しておいて使用していました。

写真のタノキノシオキは昭和三七（一九六二）年に愛媛県境に近い吾川郡仁淀川町大植の民家で見かけたものですが、長さ五五センチ、膨（ふく）らんだ部分の径が九センチありました。これより小さいものや細長いもの、丸みを帯びたものなど太さや形はいろいろでした。なお狸の肉や脂（あぶら）はハンドや瓶（ビン）などに塩漬けにして保存しておいて薬用にすることもありました。

仁淀川町大植で見かけたタノキノシオキ（一九六二年）

考古

仏跡巡礼
―釈尊生誕の地ルンビニー①―

お釈迦さまは仏教の開祖です。仏教は日本の文化に大きな影響を与えたことは周知のところです。釈迦という名称は、わが国では一般的に釈迦牟尼の略称として用いられていますが、本来は古代の名族シャーキャ族のことを指しています。さらに、釈迦牟尼とはシャーキャ族の聖者の意味で、釈迦牟尼世尊、釈尊とも呼ばれます。

釈尊は、現在のインドの北に接するネパールで生まれました。姓はゴータマ、名をシッダッタといいます。執政官シュッドーダナ（浄飯王）を父とし、マーヤー（摩耶夫人）を母として生まれました。生まれたのは、紀元前四六三年頃（中村元説・異説もある）といわれています。釈尊は、ネパールのカピラヴァトゥという小国家を形成していた釈迦族の出身です。カピラヴァトゥの所在については、ネパールのテイラウラコット付近或いは、インドのピプラハワーの二説があります。釈尊誕生の地は、カピラヴァトゥ近くのルンビニー園で、マーヤー夫人が実家に帰られる途中、休息された時に袖の下から生まれたと仏伝では伝えられています。ルンビニーのマヤ堂には誕生の時の様子を刻した彫刻があります。なお、生後まもなく夫人は亡くなりました。

（岡本）

ルンビニー　マヤ堂　釈尊誕生像

歴史

土佐の教育史研究事始め②
―藩校（教授館）―

藩校の歴史を究明するために、現在は土佐藩最初の藩校、教授館の創始者である八代藩主豊敷のことを調べています。

豊敷は、大忍郷山北（香美郡香我美町山北）で生まれ、約一〇年間、山北の地で育ちました。土佐藩の家老であった父、規重が、深尾家と孕石家の縁談の縺れにまきこまれ、六代藩主豊隆より山北に蟄居を命ぜられたためです。規重は、豊隆の死後、蟄居を解かれ、七代藩主豊常の補佐役に起用されました。規重は儒学を重んじ、「学否弁論」を著しています。

七代藩主豊常が早世すると、嗣子も無かったので、豊敷が跡を継ぎ八代藩主となります。豊敷は、藩士の資質を高めるために人を育てることが大事だと考え、藩に文教を起こそうと思い立ちました。そのためには常設の学館設立が必要ということで、宝暦九年（一七五九）一二月に教授館を創設したのです。教授館の創設は、父、規重の「好学」の血を受け継ぎ、幼い頃から父に学問の手ほどきを受けてきた豊敷ならではの英断だと思います。

学問の重要性は現代にも通じますが、時代背景により学問の主流は異なります。教授館では特に朱子学が講ぜられました。朱子学は藩士が藩主のために尽くすことを謳う学問で、時代に即していたのです。

約一〇〇年に亘り存続した教授館によって、土佐の教育は幕が上がったと思います。

（大森）

山内豊敷生地

民俗

新たな鬼面との出会い

約一〇ヶ月の短い、しかし密度の濃い準備期間を経て、企画展「鬼」は開催されました。

さて、展示が始まると、それまで集めた情報や知識を今度はみなさんに提供する方向へと一八〇度方向変換するのですが、そればかりでもありません。展示をすると必ず新しい情報が入ってくるのです。

津野町の片岡直広さんのご案内で、同町黒川の大本五社神社を訪ねました。集落の中央に立つ神社にお目当ての鬼の面はありました。

「何に使っていたのでしょう?」と尋ねましたが、神社に集まって頂いた三、四人の方々は面を使った所を見たことがありません。見たことがあるという何人かのお年寄りの方のお家に連れて行って頂きました。すると、この鬼面の役者が暴れているのを、御幣を持った神職が、木の枝で作った小屋のようなものに追い込むといった儀礼に使ったことがわかりました。木の枝の小屋に入ったことで鬼が鎮まったことをあらわしているのです。これは、檮原町や旧東津野村に伝わる神楽のダイバンと似ているようですが違います。もっと古い鬼の芸ではないでしょうか。

展示は新しい出会いももたらしてくれるのです。

（梅野）

津野町黒川大本五社神社の鬼面

鬼のおとしもの

10月10日に終了した「鬼」展ではいろいろな試みを行いました。

1 プロジェクトD ディスプレイ

「いやー、鬼の手がある！」
「恐い！」
こんな声が毎日のように聞かれた『鬼展』。
これらの品々は、実は工作の得意な職員がアイデアを出して制作したもの。
夏休みを迎えての楽しい展示にしようとのねらいです。
狭い企画展示室に留まらず、館内のあちこちに鬼をディスプレイしてみました。

入口の自動ドア
入ろうとすると鬼の顔が真っ二つに割れるしかけ

コレって本物？鬼の腕

階段の灯

入口にはためいた鬼の旗

2 だいばん大活躍！

だいばんに抱っこしてもらうとおねしょが治ると言われているよ。
子どもは大泣き。大人は大笑い。
池川神楽保存会の皆様ありがとうございました。

3 鬼蔵くん

鬼展の案内役として職員が可愛らしい鬼を描きました。

会場のあちこちに鬼蔵くんが。
色んな顔をしていました。みんな見つけられたかな？

4 カルサポ 百手大作戦！

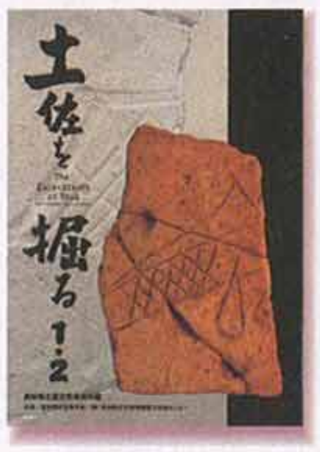
古来より伝わる「百手（ももて）」の現代版を、カルチャーサポーターの方々と行いました。
弓矢や的はカルサポさんの手作りです。
「百手」は矢を射って「鬼」という文字が裏に書かれた的に当てて鬼を払う行事です。
子ども達も初めは難しかったようですが、しだいに「コツ」を覚え、的の近くに当たりだし、当たると拍手が起きました。

「鬼」の題字は前館長の吉村淑甫さんに書いていただきました。

岡豊山のさんぽ道

秋を探しに
来ませんか

新刊のご案内



「土佐を掘る1・2」

平成16年12月～17年５月にかけて行われた企画展「土佐を掘る」の図録です。香北町刈谷我野遺跡、土佐市居徳遺跡群、南国市田村遺跡群出土資料を収録しています。

頒価650円（送料210円）

資料目録　最新刊！

寺石正路関係資料目録Ⅰ

歴史分野　絵葉書・封書編③

当館収蔵の寺石正路資料から、絵葉書・封書目録の３冊目。

頒価670円（送料210円）

館受付で販売中。郵送希望者は送料とあわせて現金書留か郵便振込でお申し込みください。

○口座番号　01610-2-61369
○加入者名　（財）高知県文化財団

ひとこと

- 「古絵図」調査では県内の海村を歩いて真っ黒に日焼けしました。（野本）
- 大脇先生のお話はご紹介した内容の10倍以上の分量がありました。モッタイナイ！（中村）

岡豊風日（おこうふうじつ）第55号
平成一七年一一月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044　南国市岡豊町八幡１０９９－１
TEL　０８８－８６２－２２１１
FAX　０８８－８６２－２１１０
開館時間　午前９時～午後５時
（入館は午後４時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は翌日）、年末年始（12月28日～１月４日）、臨時休館日あり
入館料　通常期［常設展］大人（18歳以上）450円・団体（20人以上）360円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（１名）
印刷・㈱飛鳥

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成17年11月～平成18年３月の催し物

企画展

『新収蔵古絵図展
―描かれた土佐の浦々―』

平成17年11月26日（土）～平成18年２月26日（日）

当館が新規購入した江戸時代後期頃の土佐の浦方絵図約70枚を一挙に大公開する企画展です。
また、伊能忠敬と測量隊が作成した「伊能大図」の四国部分（複製）を期間限定（1/7～1/22）でフロア展示します。

企画展講演会

平成18年1月21日（土）　14:00～16:00

「近世土佐の浦について」 講師　荻　慎一郎氏（高知大学教授）

要予約　葉書かEメールで住所、氏名、電話番号をご記入のうえお申し込みください。入館券が必要です。

展示室トーク　＜予約不要ですが、入館券が必要です。＞

企画展「新収蔵古絵図展」の展示解説を行います。

平成17年　①12月３日（土）　②12月10日（土）　③12月24日（土）
平成18年　④１月14日（土）　⑤１月28日（土）　⑥２月18日（土）
⑦２月25日（土）

時間はいずれも14:00～15:00（会場：企画展示室）

館長講座　＜予約不要ですが、入館券が必要です。＞

①平成18年1月７日（土）　「海の民俗」　14:00～15:30
②平成18年2月11日（土・祝）　「川の民俗」　14:00～15:30
講師　坂本 正夫 館長　（会場:AVホール）

学芸員講座　＜予約不要ですが、入館券が必要です。＞

平成18年2月4日（土）「浦方絵図から見えるもの」14:00～15:30
（会場:AVホール）

史跡巡り

古絵図を歩こう（東洋町）　平成17年12月17日（土）

浦方絵図のうち、東洋町周辺を描いた古絵図をガイドマップにして、フィールドワークを行います。

＜専用申込書をご請求下さい。申し込み締切12月1日＞

テーマ展示（総合展示室）

坂本龍馬　平成17年11月1日（火）～12月4日（日）

龍馬生誕170年目にあたる今年、龍馬の手紙や遺品から、その魅力に迫ります。

山内一豊と乾彦作　平成18年1月5日（木）～3月31日（金）

大河ドラマ「功名が辻」の放送開始にあわせて一豊の家臣・乾彦作とその子孫の資料を展示します。

企画コーナー（民俗展示室）

おひなさま　平成18年2月4日（土）～3月31日（日）

館蔵の城田政治氏郷土玩具コレクション等から、おひなさまを展示します。